

旅行記

安心院から由布院へ

文化財を訪ねてめぐる

養生所文化財調査委員

本会会員 伊賀重雄

朝来の雨で、今日は行程全部を消化出来るかどうか予感出来ず。加えて私には先約の朝の仕事があり、九時出発を十時出発に変更しなければならぬ破目となった。養生所の文化財委員会の、宇佐安心院地方研修旅行の第一日、六月十七日は私の所用のため、委員さん達に御迷惑をおかけしたことを深く詫言たい。

九時四十五分桐木路、十一時すぎ大分で先約同行の大分労働基準局の深文定義氏と落ちあい、鉄輪経由十文字原を通り、安心院へ向った。先行の益田先生の車を見失った私の乗った深矢氏の車は、濃霧の十文字原と手さぐりに徐行運転を繰り返して、やつとこの思いで安心院下、在の安心院所役場に辿り着いた。先着のはずの益田車は私達より後になつた模様、鉄輪で安心院への道とより違え左とこのことで、三十分程おくられて着いた。



先ず腹ごしらえ、遅い昼飯

を附近の食堂でとり、さて両の中での現地研修、道は不案内弊ねもとめてとると成果の挙がらぬ事は必定と困っている処、幸い未合せた安心院所議事事務局長の藤田義弘氏が案内を引き受けて下さるとい

う。まさに地獄に仏とはこの極なことで、一同ホッとしたのであった。

それから藤田氏の車の先導により、まず最明寺につく。ここには県指定の五輪塔が一基あり、種子により四方仏が陰刻され、正元元年(二二五九)の記年銘が陰刻されている。この寺は北條時頼の創建と寺伝にあり、国東町の安養寺と同じく、北條・足利とつづく鎌倉幕府中かりの寺である。創建の古さと境内の静かなたずまい、銀杏の樹の下に眠る五輪の主な、七百年の昔この安心院のありと支配していた豪族であつたことである。

つぎは佐田社。板碑は角塔婆の形式で、梵字の彫りもよく、県下でも貴重なものとして祀られている。外にこの佐田社の境内には数十基の石灯籠があり、旧幕時代のものが大多数である。

車は頼雨の中を、藤田氏の先導で津彦川中流小支谷の今日一番と期待する榎本磨崖仏である。道路より小道を約三百米行つた処の、杉林の丘陵にマサリ立つ磨崖懸崖に彫刻された、大小四十五体の諸仏が一面に陰刻、陽刻されて居る。記年銘も応永三十五年(一四四八)と刻まれ、この不便の地で修験道の道場として尊崇を集めたことが想像される。しかし文化財の保護の面から見るとこの磨崖仏の、管理且もう少し手の入れようが考えられてほしいと思つた。

最後に杭昌寺の地獄、極楽を見学し、今日の安心院での行程を終り、一路由布院に向う。案内役をなされた藤田氏に心からお礼を申し上げたい。

由布院の宿泊は、最初佐伯松浦出身清家さんの経営する「ニュー富士」の予定であつたが、先約があり姉妹旅館の「ふじよし」にきめ、午後五時に到着して早速お湯

に今日一日のつかれをいゆし、夕食をいただきながら雑談したのしんだ。

午後七時半より席を改めて昭和四十七年度第一回の弥生所文化財保護及調査委員会を開き、次の様なことが決定した。

保護委員会の四十七年度の事業

- (1) 小倉磨崖石塔管理費 六、〇〇〇円
- (2) 某指定洞明寺ナギ保護費 七、〇〇〇円
- (3) 磨崖石塔横参道保護鉄柵 一七、〇〇〇円
- (4) 風流杖踊(尺間)保存

これについては所当局より保存会に対して七〇、〇〇〇円助成金の形で出してあるが、

委員会の扱いかつには入っていない。

指定調査 次の物件に対して調査し、順次指定する。

- (1) 出納藤左衛門ノ事績
- (2) 宇藤木の宝篋印塔(永承年間)
- (3) 塔の水一瀬家の板碑並に石礎
- (4) 白山の板碑、聖式連碑(元徳二年)
- (5) 五條家の文書

その他公民館の新設に伴う文化財の収集等についての研究

午後八時半開会。

湯布院の夜は、別府と異った清浄な夜であった。雨の中の一夜はすつかり疲れれども、明日の湯布院を心待ちして眠りにつく。

第二日、午前六時に起床。湯布院の朝おけはすばらしい。やわらかい日射しにやわらかなみどり、狭霧の白い高原の朝は美しく、私はひとりこの景観をたのしむ。朝食後ニュー富士の若主人が迎えに来てくれて、今日

の案内役もこの人がしてくれまるとのこと、「有難いこと」と思わず言う。

ホテルに着きお茶を煮き、最初は由布院中央公民館を見る。所を中心にあり、至れりつくせりの設備、うらやましい限り。特にこつた茶室をど心のくびり方がよい、岩尾所長の所氏福祉に対する熱の入れ方がわかるような気がする。

「ぎは仏光寺の六地藏石像を見る、よく行き届いた庭に石幢は建っている。由布院がそのかみ大永四年(一五二四年)頃は宇佐氏の支配下であったことが銘文でわかる。建立者として「宇佐宿禰長弘公」とある。

山のふどりを風吹けば池に乱れる夏の色

ここの岸辺におか立ては世に悲しきはあらじとよ

三上於菟吉

金鱗湖を小説家の三上先生かうたっているが、来て見れば河の夜替もないような小さな沼、然し冷たい水と温い湯が交互に出ると云う。附近には年中無休の昔ながらの湯治場がある。

仏山寺に詣でる。草葺の大きな建物、住職の好意で社仏を拜観する。それから六所宮に参拜して、林立する古代杉のすばらしい心に奪われ、参道の横の小々な池に棲む。佐伯の城山にある池と同じで、あまり管理がよくないようだ。文化財の保護は専門的を、徹底した経営が必要だということ、つくづく感じた。

一行はニュー富士で昼食をとり、午後一時由布院を後にし、別府経由帰路につき、午後四時弥生所に帰着したが、研修となると少々疲れるが、然し楽しいものであると思つたことであつた。

(おわり)